土木史および土木技術者倫理

土木技術者倫理
(5) 土木技術者に求められる倫理

平成２２年度

東京工業大学
川島一彦

１０．発注者側技術者に求められる技術者倫理

１０．１　自らの責務の重さを自覚し、使命感と誇りを持つこと

●公共事業が税金の無駄使いの象徴のようにマスコミに取り上げられ、予算削減が進む中、土木技術者はともすればうつむき気味で活力をなくしがちである。

●安全･安心で潤いのある社会、美しい活力のある国土造りのために、土木技術者がなすべき仕事はまだ多数ある。これは、先進国の社会資本インフラや生活環境を見れば明らか。

●土木技術者は、その専門知識を生かして、良好な社会環境の整備と維持に向けて大きな貢献が求められているということを忘れてはならない。

●土木技術者は、国民生活の向上や都市・地域の競争力、産業の競争力等の向上に、重要な役割を担っている。

１０．２　国民に対する説明責任の重要性

●土木技術者は、納税者である国民に対する説明責任をしっかり果たす義務を負っている。

●裏返せば、国民に説明できないことはやらないという意識を堅持すべき。

●かつて、戦後の復興期や高度経済成長期には、社会が求める社会資本像が明確で、土木技術者は官民を挙げて、これらをより早く、大量に、安く造ることに注力すれな、社会の要請に応えられた。

●しかしながら基幹となる社会資本整備がある程度のレベルに達し、国民の価値観が多様化した今日、優先して整備すべき社会資本像が見えにくくなってきた。

●それに伴い、土木技術者は、何を造るかを決める段階から積極的に国民と対話し、対象となる事業の内容や意義を分かりやすく説明して、国民の理解と賛同を得ることが求められるようになってきた。

●このプロセスを軽視して事業を進めると、「土木屋がまた造りたがっている」という非難を招く可能性が高い。

●都合の悪いことを隠すことは、事業内容そのものよりも隠す行為が厳しく糾弾される傾向にあることを十分認識する必要がある。

●悪い情報も開示されるという安心感を国民が持ってこそ、信頼関係が構築される。

●土木技術者には、地域住民やマスコミに必要な情報をタイムリーに分かりやすく伝えるコミュニケーション能力が重要となっている

１０．３　過去からのしがらみに基づく惰性で仕事を進めない

●事業の採択、継続、中止などを判断する事業評価は、土木技術者に課された最も重要な任務の一つである。

●情報開示･説明責任が一段と求められる中で、ごく一部の事業に対してでも、過去のしがらみや惰性で判断を下していることが判明すれば、公共事業は税金を無駄遣いをしている、建設業界のためにやっている等の社会的な批判につながる

●土木事業は、長い検討期間を経て着手され、その建設にも長い時間を必要とする。その間に、社会情勢が変化し国民の要望も変わるため、事業の必要性や優先順位が変化することは当然である。

●変化を当然として、常に社会や国民の要望を踏まえつつ、節目ごとに評価・判断し、柔軟に事業推進を変更することが発注者が担う重要な役割である。

１０．４　会計検査院怖さになすべきことを放棄しない

●「受注者からの新技術の活用の提案を会検対応を考えて、とりやめにした」等、会計検査対応に関する指摘が多い。

●前例主義や責任回避の風潮は、国民の利益を犠牲にし、安易な対応に走っている。

●発注者側技術者は、国民の税金を託されているとの認識を常に堅持し、国民の利益につながるような変更や提案等を積極的に取り上げるとともに、進んで会見検査担当者を説得する気概が求められる。

１０．５　契約の明確化

●契約条項以外の課題や業務を受注者に押しつけない。受注者からの工期、金額等の変更申請に適切な対応を怠らない。

●いったん契約したからには、その契約金額の中でうまくやっていくのが業者の腕であり、なんとかうまくやってくれという態度の官庁が多い。

●契約概念の徹底が重要

●当初予期できない事態が発生した場合の対応、官民の責任等、日本の公共事業の特記仕様書が前近代的。

１１．建設コンサルタンツに求められる倫理

11．1　自己の良心と信念に従った行動

●契約に基づいて建設コンサルタンツが業務を進めるといっても、やはり発注者は強い。

●建設コンサルタンツの業務では、発注者との信頼関係を崩したくないばかりに、技術者としての主張も十分できず、発注者の指示に従うことを良しとせざるを得ない場合も多い。

●業務の顧客は誰なのか？業務の発注者なのか、それとも利用者である国民か？

●独善でなく、社会に対して自信の持てる信念と良心を研ぎ続けることが重要。

１１．２　プロフェッショナルを目指す

●サラリーマン意識からの脱却。医師や弁護士と同じ専門職業家であるという意識が重要。

●プロフェッショナルに必要な要件

✓誰にも追従を許さない高い技術

✓利益追求だけではだめ

✓“国民のために”という意識、社会的な貢献。国民からプロフェッショナル集団としてみなされることが重要

１１．３　倫理的な問題を生む温床を断ち切る覚悟

●契約書が前近代的なことが、倫理的な問題を生む温床になっている。すべてのリスクヘッジを民の持って行く方式は古すぎる

●プロフェッショナルとして、建設コンサルタンツを倫理的な問題に追い込むシステムを変える勇気が必要

●官庁がわるいからと言い訳するのではなく、民からもきちんとした統一意見を出していくべき

●国際的な常識に合わせる。土着企業である建設業ではこれが遅れすぎている

１２．　技術者の倫理

１２．１　重要な最高経営者の使命

●組織がどのような理念で何を目指すかは、最高経営者が決めなければならない。これが組織の構成員に浸透し、構成員の価値観や倫理観に合致して初めて、組織の活動の方向が決まる。

●社会の成熟とともに、組織の構成員は忠誠心を持った組織人であると同時に技術者であり、社会人でありたいと願っている。

●組織が反社会的な行動を行おうとする場合には、組織人であることと技術者･社会人であることのジレンマに直面する。

重要な最高経営者の使命（2）

●反社会的な行動をした組織に対する国民の怒りは大きく、こうした組織は総退場を命じられる時代になっている。

●最高経営者の姿勢が反社会的であったり、経営理念と行動が一致しない場合には、トップの本音はいろいろな局面を通して部下に浸透していく。

●こういう組織では、いつの間にか都合の悪い情報はトップにあがらない仕組みができる。

重要な最高経営者の使命（3）

●組織が継続的に存続・発展できるだけでなく、経営理念がどのような社会的な評価と支持のもとに実現されるかは経営者の責任。

●企業倫理は、企業のリスクマネージメントの主要な部分になっている。

●技術者が誇りを持って使命を果たしていけるか、社会に対してうつむいた姿勢で対応しなければならないかは、最高経営者の理念と倫理に大きく依存する。

●組織の最高経営者の責任はきわめて重い。

１２．２　社会に対して非倫理的な振る舞いをする企業は生き残れない時代になってきた

- 土木技術者の倫理と組織の倫理は同一ではない。個人の土木技術者の倫理だけで、組織の倫理と反する行動をとることは、多くの場合に困難かもしれない
- 非倫理的行動を取った経営者や幹部がいる会社は、組織が壊滅的打撃を受け、存続不可能になった例は、国内外に多数ある
  - ✓ チャレンジャー号事件
  - ✓ 雪印乳業事件
  - ✓ 三菱自動車
  - ✓ 鋼橋メーカー

- 非倫理的行動を取る組織は、社会から退場を命ぜられる時代になりつつある。
- 技術者倫理と企業倫理は相反するものではなく、いまやリスクマネージメントとしてとらえるべき時代になってきている

１２．３　技術者は技術力を高め、プロフェッショナルであることを客観的に国民に知ってもらうことが重要

日本

日本自動車株式会社
乗用車設計部車体設計課

課長　　佐藤　一郎

イギリス

Alex McDonald

Bsc, CEng, FIMechE, MASME

Manager, Body Design Division

British Motor Company

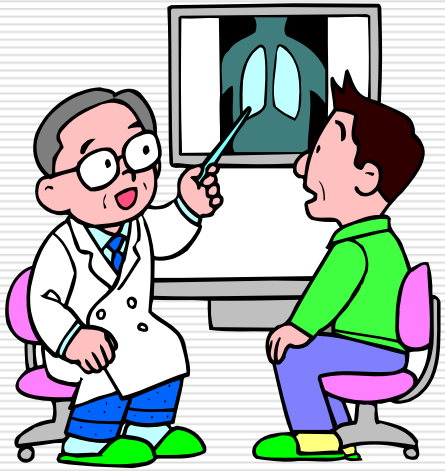
個人としての
Credentials **信用証明**

所属学会を示すこと
はプロの証

医師

尊敬される仕事
患者に直接見える

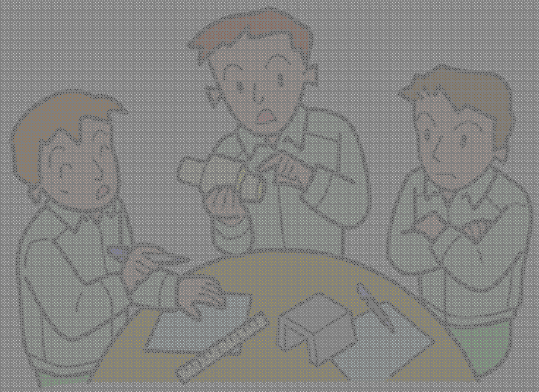
Professional



技術者

何しているの？
組織の奥に隠れている

Professional??



工学院大学　大橋秀雄氏による

土木工学とは？

土木技術者は工学を持って国民の生命と安全の向上に貢献する。

土木技術者は国民の信頼に応え、その専門技術を正しい方向に活用することにより、国民の信頼と尊敬を得る。

土木技術者は常に最新の土木技術を身につけ、専門家としての自らの技術の向上に向かって研鑽を積む。

工学院大学　大橋秀雄氏によるスライドを一部修正

１３．まとめ

１３．１　土木技術者は何をなすべきか？

土木技術者は高度な技術を持った専門家。

●土木技術者が悩むべきことは、「何が国民のためになるか？」、「どうすれば国民のためになるか？」ということ。

●土木技術者が国民生活の向上に貢献してくれると、国民から見なされるようになることが重要

１３．２　そのためには、

●技術者倫理の教科書をパラパラとでいいから、めくってみること。

●例題が役に立つ。

●少しでも知っていることと、知らないこととでは大きな差がある。

●判断するときに、「ああいうこともあったな」と思うような例があることが重要。

●判断に迷ったら、過去の事例も参考に、最後は自分の心を見て決定する。